

追悼

伊藤嘉彦先生と「夢一夜」

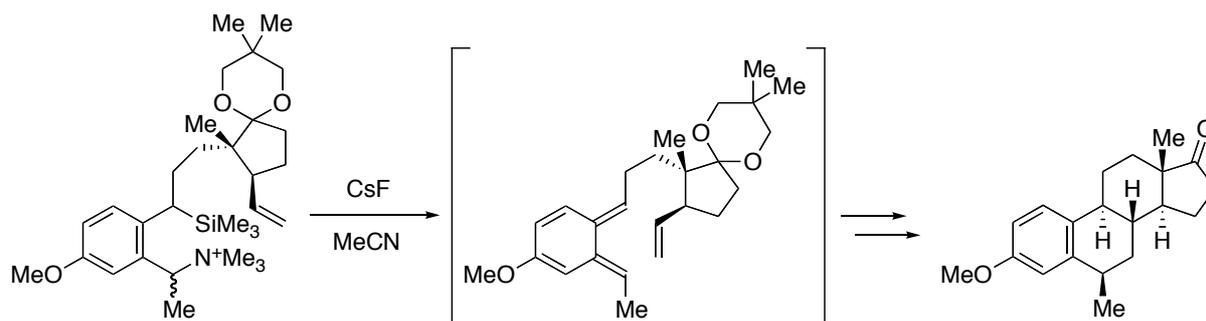
京都大学大学院工学研究科 村上正浩

今から 25 年前のことになるが、1982 年 8 月 22-27 日に IUPAC 主催の第 4 回有機合成化学国際会議が東京・新宿で開催された。H. C. Brown 教授、E. J. Corey 教授、G. Stork 教授ら錚々たる面々が講演者として居並ぶ中、日本の有機化学界を代表して当時 40 代で鋭気に満ち満ちた伊藤嘉彦先生(京都大学)、桑島功先生(東京工業大学)、山本尚先生(名古屋大学、いずれも当時)が日本オリジナルの活きのよい成果を堂々と世界に発信された。裏方の学生アルバイトとして“国際会議”と称するものに初めて参加していた博士課程 2 年の筆者は、伊藤嘉彦先生にその時に初めてお目にかかった。無論 5 年後に伊藤先生の研究室に助手として加わることになるろうとは、その時夢にも思っていなかった。

伊藤先生の演題は「A New Methodology for the Generation of *o*-Quinodimethanes and Related Intermediates—An Approach to Asymmetric Synthesis of

Polycycles」であった。ケイ素とフッ素の強い親和性を巧みに利用してケイ素とアンモニウム塩の共役 1,4-脱離を誘起する。発生した反応高活性な *o*-キノジメタン中間体を直ちにジエノフィルと反応させて [4+2] 型付加環化生成物を得る諸反応について講演された。斬新であり、しかもステロイドの短工程不斉合成(下図)にまで展開された見事な化学に聴衆は舌をまいた。今振り返ると、当時京都大学工学部合成化学教室の助教授であった伊藤先生にとって世界の檜舞台へのデビュー戦であったように思う。因みにその開会式で挨拶された IUPAC 会長は長倉三郎先生、日本化学会会長は向坊隆先生、組織委員長は向山光昭先生であった。

伊藤先生はケイ素の合成化学的な利用に早くから取り組み、上記の反応以外にも幾多の先駆的な分子変換法を見出された。シリルエノールエテルをパラジウム錯体で不飽和ケトンへ変換する反応は、その代表的なものであり、現在に至るま



で天然物の全合成などで広く利用されている。

先生は、関連分野における人望の厚さで抜きんでておられた。国内においては自身は“西”にありながら“東”の研究者と“西”の研究者の間の関係を実に上手に取りもって、学术界の運営を円滑に進められた。海外においても然りであった。伊藤先生の英語は、必ずしも「流暢」ではなかったように思われるが、化学の真髓をズバズバとつく講演は非常にわかりやすく、また所謂“aggressive さ”を全く感じさせない柔和な語り口は聞く人の心を捉え、お人柄と併せて外国人研究者をも惹きつけた。ハーバード大学の S. L. Schreiber 教授は長時間のフライトを極端に嫌うことで有名だが、伊藤先生の招きにだけは快く応じて、1994, 1997, 2001 年と 3 度京都を訪れ講演した。2001 年 6 月の退官記念祝賀会には台湾精華大学の C. C. Liao 教授と B. J. Uang 教授が駆けつけた。G. van Koten 教授(ユトレヒト大学)、P. Dixneuf 教授(レンヌ大学)、A. Ricci 教授(ボローニャ大学)、C. P. Casey 教授(ウインズコンシン大学)等々、伊藤先生の親友でありまた大ファンでもあった外国人研究者の名はここに書ききれない。今、追悼事業として伊藤先生への献辞付きで学術誌に掲載された論文を取りまとめている。伊藤先生がいかに多くの人に愛されていたか、いかに深くその死が悼まれているか、痛切に感じられる。

伊藤先生が、厳しさの中にも愛情にあふれた指導によって多くの人材を育成した名伯楽であったことは特筆に値する。今、先生のかつての弟子が産業界や学术界の随所で活躍している。亡くなられる一週間前の 12 月 16 日は先生の満 69 歳の誕生日だった。伊藤門下の同窓生が集い、古稀と有機合成化学協会特別賞のお祝いをした。先生を慕って全国から駆けつけた愛弟子に囲まれて満面に笑みを浮かべておられた姿を忘れることができない。それら後進の今後の活躍に「伊藤化学」「伊藤道」の香りが末永く感じ続けられることであろう。

筆者は、伊藤先生が熊田誠先生の後任として教授に昇格された 2 年後の 1987 年に伊藤研究室の助手となった。以来、研究上のことはもちろん、広く人生や京都の街についてもたくさん学ばせていただいた。大阪ご出身であったが、京都をこよなく愛する京都人だった先生にとって、吉田キャンパスから 2 km 余り南下した界限もお気に入りのエリアだった。『スハダにカタソデ通しただけで…』と歌う声には、南こうせつとも違う独特の色気さえ漂った。もしかすると今頃は一層とノドに磨きがかかっているかもしれない。そうあって欲しい。十二分に多忙で、そして充実した一生を駆け抜けられたのだから。安らかにおやすみください。ありがとうございました、伊藤先生。

合掌